

# 総合的学習の展開を阻害する要因についての検討(1)

## A Study of Factors that Inhibit Implementation of Integrated Studies Learning (1)

村 井 万寿夫  
Masuo MURAI

### 〈要旨〉

小学校の教師を対象とした総合的な学習の時間（以下「総合的学習」と称す）に関する質問紙調査によって、指導にあたる教師の意識や取組状況、総合的学習の指導に必要とされる力量等について整理・分析し、総合的学習の展開を阻害する要因について検討した。その結果、次の6点を明らかにすることができた。①若手の教師ほど総合的学習を得意としていない傾向があるが、指導が好きだと意識している教師は多い。②総合的学習の学習指導を得意だと意識している教師は多くないが、指導が好きだと意識している教師は多い。③総合的学習が全く好きでないと答えた教師は、一人の教師で総合的学習を展開することに限界を感じている。④総合的学習に必要なと考えられる教師の力量の中で、身に付いていないと意識している教師の割合の多いのは「環境設定力」である。⑤児童の学習状況については概ね良好であると言えることができる。⑥総合的学習のねらいに迫れたかについて評価するための評価方法が課題である。

### 〈キーワード〉

教師の意識 「得意」と「好き」 教師の力量 環境設定力 評価方法

## 1 研究の背景

1998年の学習指導要領改訂によって創設された総合的な学習の時間（以下「総合的学習」と称す）は、創設の趣旨にあるように、「各学校が地域や学校の実態に応じて創意工夫を生かして特色ある教育活動を展開できるような時間を確保すること」<sup>(1)</sup>である。

これを具体化するために、「よりよく問題解決する資質や能力を育てること。学び方やものの考え方を身に付け、探究活動に主体的に取り組み、自己の生き方を考えることができるようにすること」<sup>(2)</sup>の2つの面から、総合的学習のねらいが設定された。

以上のことを要約すると、創意工夫して教育活動を展開する中で、問題解決能力、学び方、考え方を身に付け、生き方を考えることが総合的学習であると言える。

このように考えると、従来からの教科の学習とは異なった学習であることが分かる。すなわち、共通に教えるべき内容は示されず、ねらいだけが示されているのである。よって、各学校は、文字通り、地域や学校の実態に応じた教育課程を編成しなければならない。しかも、学習の内容や方法を考え、評価計画を立て、特色ある学習活動を展開していかなければならない。そのため、学習の場所は学校内に

留まらず、地域に出かけて地域の人たちに学んだり、地域のことを調べたりする学習が全国の各学校で展開された。

川村ら（2012）は、総合的学習における学習活動の特徴として、多様性と調査型学習重視があげられる<sup>(3)</sup>としている。総合的学習の趣旨及びねらいと突き合わせると、多様性は「創意工夫」を意味し、調査型学習は「探究活動」を意味し、教科の学習活動とは異なった総合的学習の特徴が見えてくる。

筆者は、総合的学習が従来の教科とは異なった学習であることから、総合的学習を展開する上で教師には新たな力量が必要であるとの視座のもと、どのような力量が求められるのかについて研究を行い、総合的学習の学習過程に対応した力量を以下の6つに整理した。<sup>(4)</sup>

- ①単元設計力…学習単元を構成して学習指導案を構成する力
- ②授業評価力…自らの授業を評価する観点を明確にして評価と考察を行う力
- ③学習評価力…子どもたちの自己評価や相互評価の方法について具体化できる力
- ④環境設定力…人的環境（外部講師）やメディア環境（ICT）などの学習環境を整えて具体化する力

- ⑤課題分析力…児童が解決すべき課題の予想とその価値性について分析する力
- ⑥状況把握力…学習が展開・進行する過程で学習状況を把握して対処する力

これらの力量は、総合的学習を展開し、上で必要最小限の力量であるとも言えるため、教師には様々な力量が求められる。

このようなことから、指導にあたる教師にとって、総合的学習を得意とする意識には一定の差異があるのではないと思われる。また、そのことが総合的学習に対する取り組みの違いになって表れるのではないと思われる。

## 2 研究の目的

本稿においては、小学校教師を対象とした総合的学習に関する質問紙調査によって、指導にあたる教師の意識や力量などについて整理・分析し、総合的学習の展開を阻害する要因について検討することを目的とする。

## 3 研究の方法

### 3-1 質問紙調査の対象と依頼方法

金沢市内の小学校から学年2クラス以上の学校を任意に10校抽出し、第3学年以上の学級担任に質問紙調査を依頼する。

依頼は、10校の小学校を個別に訪問し、学校長に文書と口頭で依頼する。

なお、質問紙は対象の教師の人数分（計121人分）を手渡しする。

### 3-2 回収方法と期間

各学校の学校長には返送用の封筒を渡し、回収後に郵便ポストへの投函を依頼する。

調査の期間は2014年12月10日～12月20日までとして、12月17日を目途に投函の依頼をする。

### 3-3 質問の内容

#### 3-3-1 教科や総合的学習の「得意」について

第3学年以上の学級を担任する教師が担当することが多い国語、社会、算数、理科について、教師がどの程度得意としているか、選択式（複数選択可）の回答を求める。

同様に総合的学習をどの程度得意としているかについて、4件法（とても得意、まあまあ得意、あまり得意でない、全く得意でない）での回答を求める。

#### 3-2-2 総合的学習の取組や意識について

総合的学習に対する取組や意識についての質問を設け、該当するものを選択するように求める。

#### 3-2-3 「教師の力量」について

筆者がこれまでに明らかにしている、教師に必要な6つの力量に関する質問を設け、4件法での回答を求める。

#### 3-2-4 児童の学習状況について

総合的学習のねらいに照らし、児童に身に付けさせたい能力や態度についての質問を設け、4件法での回答を求める。

#### 3-2-5 評価方法について

総合的学習の評価として多く取り入れられている方法をもとに質問を設け、4件法での回答を求める。

#### 3-2-6 総合的学習が「好きか」について

冒頭のほうで教科や総合的学習の得意について質問しながら、総合的学習についての取組や意識、教師の力量、学習状況、評価方法についての回答の最後に、総合的学習を指導することは好きか、4件法での回答を求める。

ここでの質問は、「得意」と「好き」に相関があるかについて検討するためである。

## 4 研究の結果

### 4-1 アンケートの回収と回収率

調査の期間中、10校すべての小学校から回答があった。回答した教師は117人で、回収率は96.7%であった。

### 4-2 アンケートの結果と考察

#### 4-2-1 指導することが得意な教科について

国語、社会、算数、理科の中で「得意である」と答えた教科は算数が一番多く、40.8%を示している（図1）。

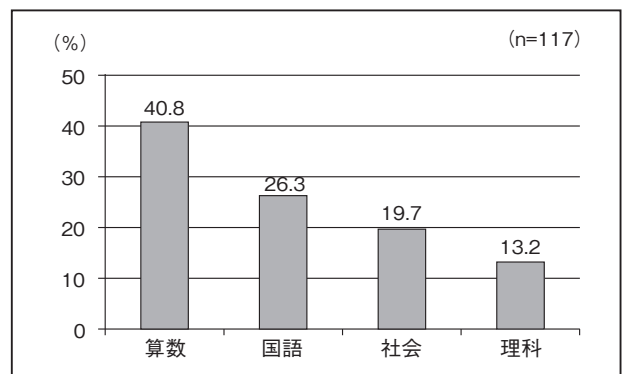


図1 指導することが得意な教科

そこで、算数を得意な教師は総合的学習も得意としているかの傾向を探るため、教科の学習指導が「得意か」と総合的学習の学習指導が「得意か」についてクロス集計を行った。その結果、算数が得意だと答えた教師は「総合的学習はあまり得意でない」と答える割合が一番多く、26.3%

を示している。

このことから、算数の指導は得意だが総合的学習の指導は得意ではないという傾向があると言える。

#### 4-2-2 総合的学習の「得意か」と年代との関係

教師の年代によって総合的学習を得意とする割合に違いがあるかクロス集計を行い、グラフ化した(図2)。

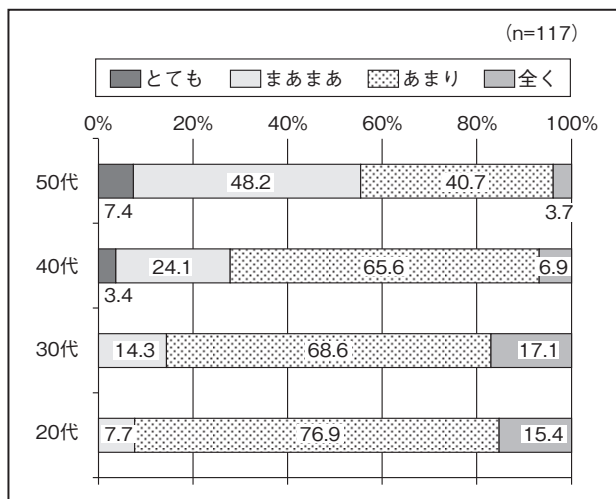


図2 総合的学習の「得意か」と年代との関係

上図のように、総合的学習が「とても得意である」と「まあまあ得意である」を合計した割合は、年代が上がるごとに増加している。一方、「あまり得意でない」と「全く得意でない」を合計した割合は、年代が下がるごとに増加している。このことから、若手の教師ほど、総合的学習の指導を得意としていない傾向があることが分かる。

#### 4-2-3 若手教師の総合的学習が「好き」について

若手教師を対象に「総合的学習を指導することが好きか」についての検討を行った。

まず、アンケートに回答した教師の年代別の割合を算出した(図3)。

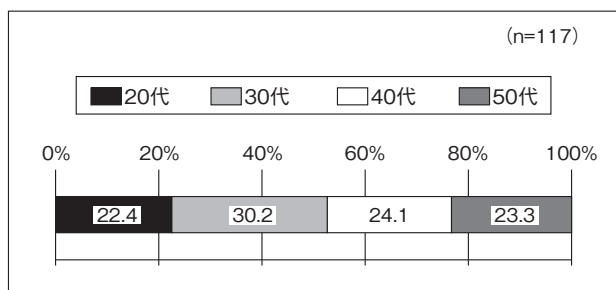


図3 回答者の年代別の割合

この結果から、10校の小学校の第3学年から第6学年を担当する教師の年代別の割合には大きな違いがないことが分かる。

次に、年代別割合をもとに22.4%にあたる20代の教師の

「総合的学習を指導することは好きか」についての割合を算出した(図4)。

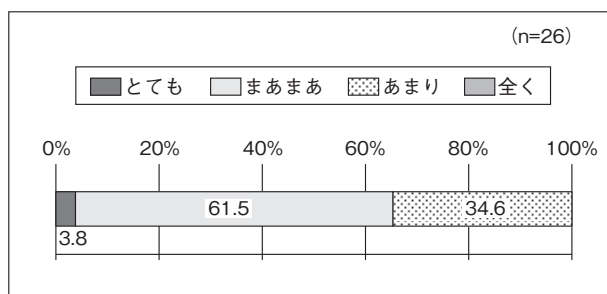


図4 20代教師の総合的学習は「好きか」

上図から分かるように、「まあまあ好き」と答えた割合が最も多く61.5%を示している。「とても好き」(3.8%)を合わせると65.3%になる。

これらのことから、若手の教師は総合的学習を得意としていないが、総合的学習の指導が好きだと意識している教師が多いことが分かる。

よって、若手教師が総合的学習を得意だと意識するための手立て(研修会や自己研修など)が必要であると考えられる。

#### 4-2-4 総合的学習の「得意か」と「好きか」について

総合的学習が「得意だ」と答えた割合(2.6%)と「まあまあ得意だ」と答えた割合(23.1%)の合計は25.7%を示し、得意だと意識している教師の割合は高くないことが分かる(図5)。

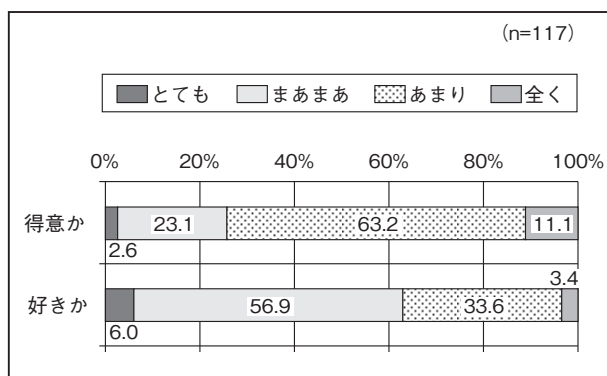


図5 総合的学習が「得意か」「好きか」

一方、総合的学習が「好きか」についての割合は、「とても好き」(6.0%)と「まあまあ好き」(56.9%)を合わせると62.9%を示し、好きだと意識している教師が多いことが分かる。

これらのことから、教科や総合的学習の学習指導においては「得意でない」といった意識を抱く教師は多いが、総合的学習を「好きだ」と意識している教師が多く、「得意」と「好き」には相関がないことの示唆が得られる。

#### 4-2-5 総合的学習の「好き」の理由

総合的学習が「好きか」について4件法による選択後、その理由についての自由記述を求めた。その結果、「とても好き」と答えた理由として、次のことが挙げられる。

- ・ 大枠の中で子どもたちが伸び伸びと学習ができる。
- ・ 学びの価値と効果を考えて教育課程を作成できる。
- ・ 教科を発展させた学習を展開できる。
- ・ 広く深い学びの経験ができる。
- ・ 時間と環境が許せばとても楽しく学習できる。
- ・ 意欲的に豊かな発想で学習を進めていっている。
- ・ 意欲を持って主体的に学習に取り組んでいる。
- ・ 子どもが主体的に学んでいる。

「とても好き」と答えた教師は全体の6.0%であるが、学習の内容や方法に自由度があり、意欲的・主体的に学習できることが、総合的学習が「とても好き」だとする理由であると言える。

このことは総合的学習の趣旨やねらいのキーワードである「創意工夫」「主体的態度」「探究活動」などと合致するところであり、日常の学習指導が趣旨やねらいに迫っていると推察することができる。

#### 4-2-6 総合的学習の「好きでない」の理由

総合的学習を指導することは「全く好きでない」と答えた教師が全体の3.4%で、その理由として次のことが挙げられる。

- ・ あいまいで学習範囲が広すぎて手が回らない。
- ・ 個々の子どもの学習内容が異なり個人差も大きいことから、指導に時間がかかる。
- ・ 評価（記述）が大変である。

これらの理由から、一人の教師の指導には限界があるとも考えられ、チームティーチング等による複数の教師で総合的学習を展開していく必要があると思われる。

一方、「あまり好きではない」と答えた教師は33.6%を示しているため、自由記述について整理と分類を行い、理由の精査を行う必要がある。

#### 4-2-7 「教師の力量」について

筆者がこれまでに明らかにしている総合的学習に必要な6つの力量について、「環境設定力」はICTと外部講師に分け、環境設定力①②とした。また、「状況把握力」は学習状況把握とそれに対処する（助言する）ことに分け、環境設定力①②とした。

これらにより、総合的学習における教師の力量について8つの質問を設定し、4件法による回答を求めた。その結

果を下図に示す（図6）。

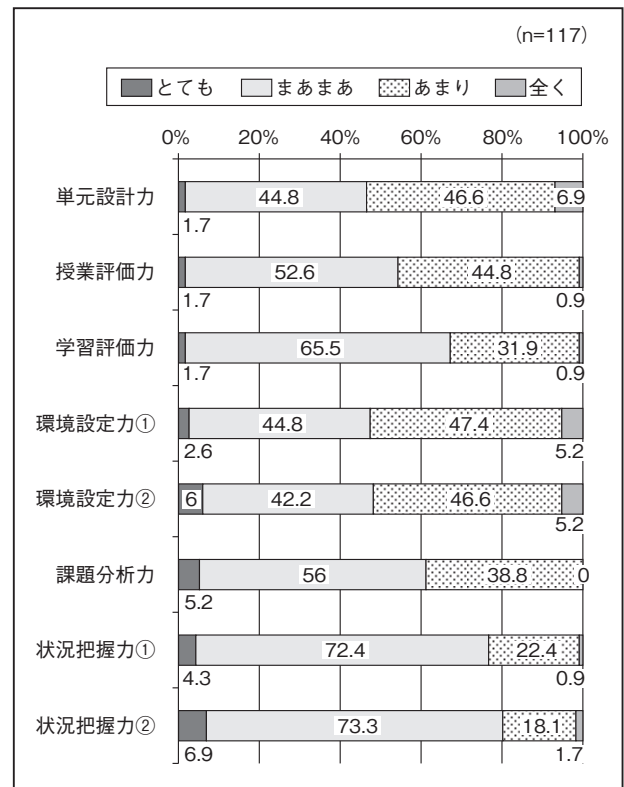


図6 教師の力量 (6観点8項目)

回答した117人の教師に身に付いていると思われる力量の割合が最も高いのは、『状況把握力①②』である。②の設問「児童の学習状況に合わせていろいろと助言を行う力は？」に対し、「まあまああると思う」と答えた教師は73.3%であり、「とてもあると思う」の6.9%を合わせると80.2%になる。また、①の設問「学習が展開・進行する過程で学習状況を把握する力は？」に対して、「まあまああると思う」と答えた教師は72.4%であり、「とてもあると思う」の4.3%を合わせると、76.7%になる。

これらのことから、調査対象の教師の多くは児童の学習状況を把握する力量が身に付いているとの示唆を得ることができる。

『状況把握力』に次いで高い割合を示したのは、『学習評価力』である。設問である「児童による自己評価や児童相互の評価（相互評価）の方法を考えて実践する力は？」に対して、「まあまああると思う」と答えた教師は65.5%であり、「とてもあると思う」の1.7%を合わせると67.2%になる。

このことから、総合的学習の過程で児童自身が自己評価したり児童同士の相互評価を行ったりしている状況にあると言える。

一方、力量に課題が見られるのは『環境設定力』と『単元設計力』である。環境設定力①の設問「課題を調べたり結果をまとめたりするためにICT環境を整えて実践する

力は?」に対して、「あまりないと思う」と答えた教師は47.4%で、「全くないと思う」の5.2%を合わせると52.6%になる。また、②の設問「外部の講師を学校に招くために講師に交渉したり打合せしたりするなどのコーディネート力は?」に対して、「あまりないと思う」と回答したのは46.6%で、「全くないと思う」の5.2%を合わせると51.8%になる。これらのことから調査対象教師の半数が環境設定力に課題があることが分かる。

村井・岡部(1999)は、小学校の総合的学習における学習環境について、総合的学習推進校の授業をもとに整理し、「学年が上がるにつれてメディア環境を重視していること、中でもコンピュータとデジタルカメラの利用度が高いこと」<sup>5)</sup>を明らかにしている。このことから言えることは、総合的学習の展開をよりよく行う際には、コンピュータやインターネットなどのICTが、調べたりまとめたり伝えたりするためのツールになる。児童自身がICTを活用して問題解決学習型の総合的学習に取り組むことで、問題解決能力を身に付けることができるのである。

一方、地域のことを調べる際には地域の人に学ぶことが必要になる。村井・岡部(1999)の研究においては、「総合的学習において、どの学年にも共通なことは、地域素材をもとにした体験的な学習を重視している」や「地域の人との直接的なふれあいや関わり合いを重視している」<sup>6)</sup>ことについても明らかにしている。これらのことから、総合的学習をよりよく展開していくためにはICTと外部講師は欠かすことができないと考えられる。

#### 4-2-8 児童の学習状況について

総合的学習に取り組む児童の学習状況についての質問を設定し、回答を求めた。設問は、「課題設定意欲」「探究的態度」「発表活動意識」「振り返り意識」の4つの観点とした(表1)。

表1 児童の学習状況についての設問

観 点	質 問 内 容
課題設定意欲	課題設定の際、児童自ら問題を発見し課題を設定しようとする意欲はどの程度か。
探究的態度	課題を設定後、主体的に探究していこうとする態度はどの程度身に付いているか。
発表活動意識	学習の成果を伝え合う発表活動の際の児童の発表意識はどの程度か。
振り返り意識	振り返りの場における児童の、自分の学び方を振り返ろうとする意識はどの程度か。

回答を整理した結果、児童の学習状況については、4つの観点いずれも「とても」と「まあまあ」と答えた割合を合わせると6割を超えており、概ね良好とすることができる(図7)。

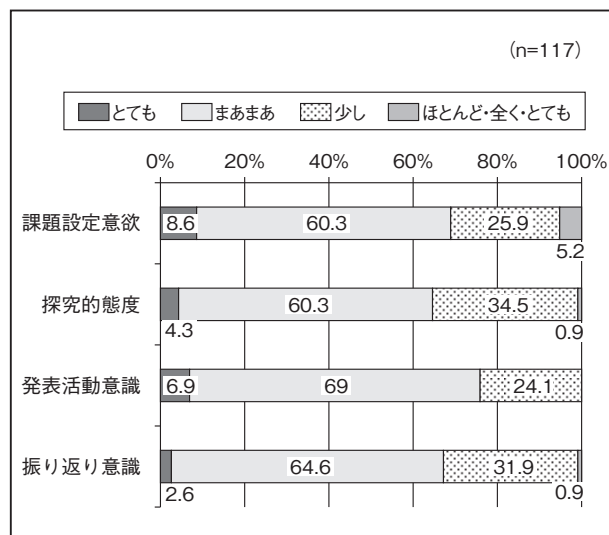


図7 児童の学習状況の観点別の割合

4つの中で特に『発表活動意識』については、「まあまあ高い」と答えた割合が69.0%であり、「とても高い」と答えた割合6.9%を合わせると75.9%を示している。

比較的低い割合を示している『探究的態度』においても「まあまあ身に付いている」と答えた割合は60.3%であり、「とても身に付いている」と答えた割合4.3%を合わせると64.6%を示している。

これらのことから、学習状況については概ね良好であると言えるが、4つの観点は児童に身に付させたい力であると考え、「とても」と「まあまあ」を合わせた割合は7割以上あるいは8割程度が目安になるとも考えられる。

#### 4-2-9 評価方法について

総合的学習の評価は、教科のように定量的手法を用いた方法ではなく、定性的手法による評価方法を用いている。その代表と言えるものがポートフォリオ評価である。

高浦(2011)は、「ポートフォリオ評価は、標準化されたテストに代わる新たな方法として考案された」<sup>7)</sup>と、テストに代わる「真正の評価」の方法としてアメリカで登場したと述べている。これが我が国において生活科が創設された時期に導入され、総合的学習が創設された時期から評価の方法としても導入されて今日に至っている。

ポートフォリオ評価は、学習結果としての表した成果物や作品だけでなく、学習過程で得た情報や記録した物、さらには、自己評価等の資料を集め、それをもとに評価する方法である。

ポートフォリオ評価以外の評価方法として、パフォーマンス評価も総合的学習に取り入れられている。

鈴木(2001)はパフォーマンス評価について、「例えば、理科の実験器具の操作ができるかを、ペーパーテストで操作手順を問う問題によって評価するのではなく、実際に実

験器具を扱う様子を観察して評価する」<sup>(8)</sup>方法であると述べている。つまり、児童の実際の探究活動を観察したり、発表活動を観察したりして評価する方法である。

その他の方法として、ルーブリックを用いた評価方法も総合的学習に取り入れられている。

村井(2004)は、「ルーブリックとは、評価指標のことである。具体的にいうと、教師は子ども達に対して到達してほしい目印(指標)をいくつか示してあげる。そして、子ども達は学習の途中や終盤などで、どの目印に到達したかを自己判断する。つまり、教師から示されたルーブリックをもとに自己評価する」<sup>(9)</sup>方法として整理している。

以上のことから、「ポートフォリオ評価」「パフォーマンス評価」「ルーブリック」を中心とする質問を設定した。

設問による回答結果を下図にて示す(図8)。

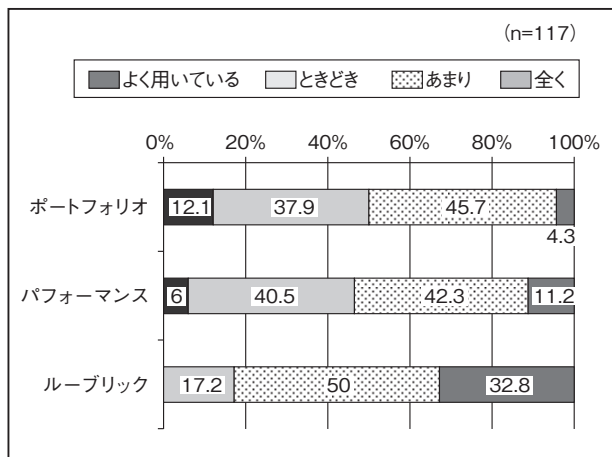


図8 総合的学習における評価についての状況

ポートフォリオ評価を「よく用いている」と回答した教師は12.1%であり、「ときどき用いている」と回答した教師の37.9%を合わせても50.0%であり、ポートフォリオ評価が総合的学習の評価方法として浸透していない状況にあ

ると言える。また、パフォーマンス評価を「ときどき用いている」と回答した教師は40.5%と比較的高い割合を示すが、「よく用いている」の割合は6.0%で、両者を合わせても46.5%であり、半数に満たない。さらに、ルーブリックを用いた評価方法を「よく用いている」と回答した教師は0%であり、「ときどき用いている」と回答した割合も17.2%に留まっている。

これらのことから、総合的学習のねらいに迫ったかを評価するための評価方法が課題であると考えられる。

## 5 研究のまとめと今後の課題

総合的学習の展開を阻害する要因について検討するため、教師の意識や力量などについて考察した結果、以下のことが明らかになった。

- ・若手の教師ほど総合的学習を得意としていない傾向があるが、指導が好きだと意識している教師は多い。
- ・総合的学習の学習指導を得意だと意識している教師は多くないが、指導が好きだと意識している教師は多い。
- ・総合的学習が全く好きでないと答えた教師は、一人の教師で総合的学習を展開することに限界を感じている。
- ・総合的学習に必要なと考えられる力量の中で、身に付いていないと意識している教師の割合の多いのは「環境設定力」である。
- ・児童の学習状況については概ね良好であると言える。
- ・総合的学習のねらいに迫れたかについて評価するための評価方法が課題である。

今後は、評価方法について回答(研修等)の未整理の項目及び「総合的学習を指導することは好きか」の自由記述についての整理と分析を行っていきたい。

## 注

- (1) 文部省教育課程審議会(1998),「幼稚園,小学校,中学校,高等学校,盲学校,聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について(答申)」, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shin\\_gi/old\\_chukyo/old\\_katei1998\\_index/toushin/1310294.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shin_gi/old_chukyo/old_katei1998_index/toushin/1310294.htm) (2014年11月参照)
- (2) 文部省(1998),「小学校学習指導要領」, PP.2-3
- (3) 川村光・紅林伸幸・越智康詞(2012),「小・中学校における『総合的な学習の時間』の実践の変容」, 関西国際大学研究紀要, 第12号, P.3
- (4) 村井万寿夫(2002),「総合的学習における教師の力量形成に関する研究」, 明星大学大学院研究紀要『教育学研究』, P.35
- (5) 村井万寿夫・岡部昌樹(1999),「映像メディアと総合的学習に関する研究」, 教育メディア研究, 第6巻第1号, 日本教育メディア学会, P.27
- (6) 前掲書, P.26
- (7) 高浦勝義(2011),「教育評価研究と生活科, 総合的な学習」, 日本生活・総合的学習教育学会, 『せいかつ&そうごう』, 第18号, PP.57-62
- (8) 鈴木秀幸(2001),「パフォーマンス評価の実践的研究」, 指導と評価, 日本図書文化協会, 4月号, P.56
- (9) 村井万寿夫(2004),「2学期制と単元通知表-導入準備と作成ヒント-」, 明治図書, P.126